

いきもの・なまもの・たへもの

郡司ヘギオ幸夫

以前わたしの単行本にカバー絵を提供してくれた中村恭子氏は、現代アート作家である銅金裕司氏と何度か二人展を開催している。銅金氏の華陶を受けた作家だ。ただし銅金氏は、ガラス管や植物の「緒」になったモダンアート、中村氏は日本画と、手法は全く異なる。何年か前銀座の画廊で二人展をやっていたとき、中村氏の蛸工図（本書カバー図）と呼ばれる日本画が展示されていた。その絵の上方には、いきものである蛸が蠢いている。蠢き、互いに密着して一個の有機体、一個のいきものに見える。はつきりと目を開き、こちらを窺うものや、粘液の中にまどろむものが、皮膚と粘膜の固まりとして蠢いている。それは、いきもの世界、完結した「いきもの」のモデルのようにも思える。ところが蠢く蛸の群れは、画面下方へ移動する動き、動きを失い、弛緩し、すでに死んで「なまもの」になっていることがわかる。さらに下方へ移動する。彼らは、水に晒すことでタンパク質が変質したように、切断面が白濁して「たへもの」になってしまっている。



《蛸工図（たこうず）》  
紙本彩色、116.7×91 cm、2011 年

いきものは死んでいく。死んだことによって、我々は、どこかへ行くと感じ、生まれることで、どこかからやってくるように感じる。それは、自分と他者との関係でもある。他者が自分の世界に現れたとき、我々はそれを発生したのではなく、やってきたと知覚し、自分の世界から消えたとき、消滅したのではなく、向こうへいったと感じる。他者がやってくる場所、他者が消えていく場所はわからず、原理的に問い得ない。他者とわたしの関係は、生と死の関係と重なり、我々はそのような断絶の中を生きながら、断絶の外部と接続していることを感じる。

同時に死んでいくことは、何かのたへものとなってしまうことでもある。いきものが失われ、なまものとなって、たへものになるとは、断絶の間に流動があることを意味する。この流動に断絶を見出せないなら、様々な生物は、食う・食われる、の順序関係をもって配列される。我々はそこにいきものが維持されるための資源が流動している様子をみただけだ。ここに見出されるのは、食う・食われる関係を無制限に展開したフラットなネットワークだ。ネットワークの一点に位置するわたしから出発して、ネットワークを移動していても、どこまでも同じ光景が展開されるに過ぎない。そこには、向こう側、わたしの外部が見出されることは決していない。対して、「いきもの」が「なまもの」となり、「たへもの」となって流動に組み込まれるとき、食う・食われる、の関係は、断絶の中に、いつてしまひ・やってくる場所→向こう側、を指し示す。この、向こう側の潜在において、食う・食われる、の関係は、断絶の中の接触、断絶に抗う流動を立ち上げ、食うもの（否定するもの、の宙吊りを実現する）。それは、否定の否認であり、否定することの流動である。蛸工図の蛸たちは、群れながら、死にゆくものであり、死んで他個体に食べられることで、群れを維持し、生きていくものだ。その一つ一つの生には、世界と断然しながら見えない向こう側を指し示す、いつてしまひ・やってくる、延長が潜在している。

『いきもののなまもの哲学』（青土社、二〇一四年）から

